

1. フレックサブル住宅における、内外装仕上りの工業化の現状を把握すると共に、工業化材の texture 選定にどのようなかかわっているかを明らかにすることを目的とする。
2. フレックサブル建築協会会員名簿より、住宅メーカー 62社に対し、郵送によるアンケート調査を行った。回答を得たメーカーのフレックサブル方式は、鉄骨パネル系(25%)、鉄骨軸組系(17%)、コンクリート系(24%)が中心であった。
3. フレックサブル住宅で多用されていた材料は、床では、じゅうたんと合成樹脂長尺シート、壁天井ではビニールクロス(壁使用率 325%, 天井 290%)であった。独立注文住宅では、壁材料の種類が多く、ばらつきがめだつたのに対し、顕著な傾向であった。室用途別の材料の工業化では、浴室(45%)が最も進んでおり、次いで台所であった。食事室、寝室、子供室は同じレベルで、便所の工業化の骨も遅れていた。室間部位別では、壁、床、天井の順で工業化度が高く、外壁では 60%を超えていた。一般的に機能性の高い部位は工業化が進んでいるといえる。工業化で多用されている材料は、ビニールクロスと合成樹脂板であり、次いで、じゅうたん、フローリング、タイル、ボード、長尺シート、瓦葺板であった。工業化の遅延理由として、住宅手への対応がめだつた。加工、施工、流通、経済性を理由としているものを合計すると 62%にも達する。全体的に、仕上りの工業化のレベルは低く、部分的にでも行っているのは、全体の 54.5%にすぎない。用途別・部位別にみると、25%しか工業化されておらず、これでは外壁と浴室の占める割合が高い。デザイン性の高い部位でも壁のように視覚中心のものは扱いやすいが、床のように触覚上の要求が加わるものでは工業化が遅れている。又、天井材は工業化が促進されるべき部位である。